河のある風景

すでに落日は　都市に冷い
都市は入江の奥に　橋を仰立たせていれる
夕暮れる住居の締蓆のなかに
時を喪った秋天のかけらを崩して
河流は　背中をそそけだてる

失はれた山脈は　みなかみに雪をかぶりて眠る
雪の双は　遠くなる生活の眉宿に光をあてる
妻よ　今宵もまた冬物のしたくを嘆くか
枯れた菊は　花瓶のプロナードにまつわり
生れる子供を夢みた　おれたちの祭りすぎた

眼を閉じて腕をいうけば　河岸の風の中に
白骨を地ちらした　此の都市の上に
おれたちの
生きた　墓標

燃えあがる焔は　波の面に
くだけ落ちるひびきは　解放御料の山麓に
そして
落日はすでに　動かず
河流は　そうそうと風に波立つ